

## 源氏車

紫 圭子

黒い地あきの大島紬

白い糸が黒地とかさなつて

かすかに銀ねずみの光沢を浮き上がらせる

柄のぼかし模様 日輪のような

牛車の輪を三つ置いた柄が飛び石みたいに浮かんで

その濃淡の距離がこころをひろげにくる

（源氏車の芯から八本骨の輻が放射状に円をささえているかたちです  
でも八本骨の一つがぼかして消えているのでそこに接する円もみんな  
欠けています

そのひとの眼の奥には夕陽が映っていた

糸を織りながら

夕陽に車をかさねていたのだろう

この世の車争い

諸々の六条御息所と葵の上の車たちを

欠けた模様の入り口から夕陽に吸いこませて

そのひととわたくしは

遙かな

轍の

水脈を手繰りよせては

眺めている

黒い地あきの大島の

裏地は赤

袖を通すと

島唄がひびいてくる